

バシレイオスの創造理解について

— 『ヘクサエメロン』 からの一考察¹⁾

飯 田 仰

1. はじめに

4世紀後半にカッパドキア三教父と呼ばれる3人の教父たちが活躍した。カエサリアのバシレイオス（330-379年）、ナジアンゾスのグレゴリオス（329-389年）、そしてニュッサのグレゴリオス（335-395年）の3人である²⁾。バシレイオスとニュッサのグレゴリオスが兄弟であり、ナジアンゾスのグレゴリオスはバシレイオスの親しい友人であった。この3人はキリスト教神学、とりわけ、三位一体論形成に大きな貢献を齎したと言われ、特に東方教会においては後代、多くの人からの敬意を受けている。

この3人はそれぞれに先代たちが残していった聖書的神学的理解を踏襲したと考えられるが、特にオリゲネスやその弟子であったと言われるグレゴリオス・タウマトウルゴスなどの影響を多大に受けていると思われる。特に兄弟であったバシレイオスとニュッサのグレゴリオスにおいては、祖母マクリナからの薫陶によって、彼女の師であったグレゴリオス・タウマトウルゴスからの多大な影響があったことは間違いなさそうである³⁾。

さて、そのバシレイオスだが、晩年に創世記第一章に記述されている創造物語に纏わる講話（或いは説教）9つが纏められた『ヘクサエメロン』⁴⁾という書物を残している。レントの時期に5日間で語られたとされるこの9つの講話において、バシレイオスが何を語り、どのように創造物語を理解していたのか。バ

シレイオスは創造物語から何を語ろうとしたのか、また、バシレイオスが如何に聖書の御言葉を重視していたのかについて簡単にではあるが見ていきたいと思う。

当研究発表において目指すのは、この『ヘクサエメロン』の内容を概略的に紹介することと、そこから垣間見ることのできるバシレイオスの神学的特徴をみることである。バシレイオスは神の姿と天地創造の目的を述べることに於いて、教会の一致を目指そうとしていたことについて確認することをここでは試みたいと思う。

2. 『ヘクサエメロン』の概略

論考を進める上で、先ずは『ヘクサエメロン』の概略と概要を確認しておきたい。バシレイオスはその晩年に近い紀元370年頃⁵⁾に創世記一章に記されている神の天地創造を巡って、計9回の連続講話を行った⁶⁾。その記録が『ヘクサエメロン』(神の天地創造の6日間)である⁷⁾。これらの講解説教はレントの時期に5日間を費やして、朝夕2回を2日間、3日目は1回のみ、そしてその後、続けて更に朝夕2回ずつ2日間、合計9回の説教として語られたものである。聴衆は労働者が主であったようで⁸⁾、「農具取引や商業に属する多くの職人が私の周りに集まっている」と『ヘクサエメロン』3・1においてバシレイオス自らが述べている。このことから、当時の聴衆がどのような者であったのかを推測することができる。おそらく信徒であると思われるこのような聴衆に向かって、バシレイオスはこの世界は神が創造されたのであって、ギリシア哲学者たちが教えるような諸原因の偶然によるとか、始まりをもたない存在であるなどということを真っ向から批判する⁹⁾。つまり、この連続説教は、当時の文化的世界観に対するアンチテーゼであり、聖書が語る神の天地創造こそがこの世界の真実を表し、それがモーセを通して我々に示され語り継がれているのだという。

バシレイオスは若き日にギリシアのアテネで学業を修めていた¹⁰⁾。よって、ギリシア哲学に精通していたことは間違いなく、更に自然科学的な知識にも長

けていた。それが『ヘクサエメロン』においても明瞭となっている。『ヘクサエメロン』においてバシレイオスの卓越した自然観察能力が大いに発揮されていると言ってよいであろう。彼の目的は徹頭徹尾、天地を造られた神とはどのようなお方であるかを示し語ることであった。

バシレイオスは開口一番このように述べる。

世界の構成について詳述しようとする者は、論述の始めに、見えるものどもの秩序づけの原理について論述することが望ましい。なぜならば、天地の創造は、ある人々が想像してきたように、ひとりでもたらされたものではなく、神によって原因づけられたものとして説明されねばならないからである¹¹⁾。

我々のこの世界が突然、偶然にもその存在を露わにし、どこからともなく始まったというようなことはない。この存在の原因、存在理由は神ご自身に帰されるのだということからバシレイオスは語り始め、その点を強調する。バシレイオスの目的と目指すべきところは、天地を創造された神へと我々の想いを向けさせることであった。こうして冒頭から彼の目的が神中心的であることを明確に示すのである。

このような主張の根拠となるのがこの創世記一章を記述したモーセであるとバシレイオスは述べる。そして、この後、暫くモーセの生い立ちやモーセに纏わる出来事について詳述し、更に神ご自身へと我々の眼差しを導く。バシレイオスはこう述べる。

それゆえ、もし宇宙が始まりを持ち、創造されたものであるならば、この宇宙に始まりを与えたものが何者であり、その製作者が誰であるかを探究しなければならない。いやむしろ、人間的な推論によって探究することで、この真理から外れてしまわないように、モーセは「始めに神は創造した」と語って、「神」という誉れ高き言葉を、われわれの心に刻印と守

り手として刻みつけて、彼の教えの先触れとしたのである。かの至福なる本性、惜しみなき善そのもの、理性にあずかるすべての者から愛される対象、大いに求められる美、存在者の端緒〔原理〕、生命の源、知性の光、近寄りがたき知恵であるかの方が、始めに天地を創造したのである¹²⁾。

こうしてバシレイオスは創造主なる神に全ての者の焦点を合わせるよう促す。

『ヘクサエメロン』2・6において大変興味深い記述がある。それが聖霊への言及である。周知の通りバシレイオスは聖霊を神と明言することに終始消極的であった。ナジアンゾスのグレゴリオスからも再三再四促されたのにも関わらず¹³⁾、なぜそのような姿勢を貫いたのかについて、決定的な納得のいく説明は今日においてもまだなされておらず、専門家の間でも議論が積み重ねられている¹⁴⁾。更に3・1においても聖霊についての言及がなされるが、そこで述べられているのは、聖霊についての教えは、来たる世界に関しての豊かな宝であるということ、そして3・2において聖書が示す天地創造は、天地を創造することを望まれた神が、その創造における「協力者 (co-operator)」(ἀλλὰ καὶ διὰ τινος συνεργοῦ παραχθῆναι ταύτην εἰς γέννησιν.) と共に創造することを望まれたのだという。

続けて第4講話においては、海について語られる。バシレイオスはこの海の波の音を神への賛美の音として解釈し、その光景を教会の集いにおける賛美と捉え語る。もし海が神の御前でその賛美に相応しいのであれば、教会の集いはどれほど美しいものであろうか。男たち、子どもたち、女たちの声が神への祈りとして捧げられ、岸壁に打ち付ける波の音のように反響している。教会もまた深い平静を享受し、悪の霊たちは異端の息吹によってでもこれに問題を起こすことはできないのであるという。創造物語のコンテキストに教会への言及があることで、一見、飛躍し過ぎているように思われるのだが、バシレイオスにとっては教会という信仰共同体の存在こそが神の創造の目的を表す媒体であり現実であることを顕示しようとしているのであろう。

次の第5講話でもバシレイオスは教会についての言及を行う。ここでは創造物語の植物の創造の部分との兼ね合いで教会について述べている。木が豊かな実りを齎すイメージが述べられて、これぞまさに教会のあるべき姿であるという。植えられている土を深く掘り下げることによって、我々の魂の中、その「内面」に存在する我々の心の重荷となるような不安やこの世への想いの有無を神は問うておられるのだという。

第6講話は天体についての内容である。ここでバシレイオスは、太陽光線の美しさに注目する。その光線そのものがあまりにも美しく、被造物の間において光り輝く目のようにその光を放つ。もしこれがこれほどの美しさであるとしたら、羲の太陽の美しさは一体どれほどになるのであろうかと言う。この「羲の太陽」とは御子イエス・キリストのことを指し示しているようであり、バシレイオスは太陽の輝きと御子の栄光の輝きをここで類比させていく。罪人には決して見ることでできない輝きがここにはあることを示している（6・1）。

バシレイオスはどうかや占星術に関する知識も備えていたようであることがこの第6講話から窺える（6・5）。しかし、それは占星術の言い伝えが信頼するに値するものとして理解しているのではない。彼はこれらの伝統が実は何の根拠もないものであることを述べ、これは蜘蛛の巣のように張り巡らされた「偽りの科学」なのだと言う（6・6）。当時の人々が如何に占星術によって惑わされ、迷信的に、盲目的にこれらの言い伝えを受け入れていたのかがバシレイオスの講話の中で如実に表されていく。

バシレイオスは述べる。天体を目で見て観察するのではなく、人間に与えられている理性によって、そこに映し出されている真理を見いだすことのできる理性を活用することによって確認すべきだと。目よりも理性の方が確かであるというのである（6・11）。

おそらく第7講話が『ヘクサエメロン』の中で最も特徴的な内容であり、バシレイオスが如何に自然界の観察に長けていたのかを如実に表すことができている内容であると言ってよいであろう。ここでは海の中の生き物についての言及が続く。特にずる賢いと言われる生物である蟹とイカについての内容は独特

である。蟹はずる賢い。この生き物は次の人のようなイメージだという。その人は自分の兄弟のところへ狡猾に赴くもの、隣人の不幸を利用しようとするもの、そして他人の問題に自らの喜びを見いだそうとするものだという。そして、こう述べる。このようなひどいことを真似てはならない。自らの状態に満足しなさいと励ます。賢者の眼には、全ての快樂よりも必要な貧しさの方がより価値があるのであるというのである（7・3）。

更にイカについてである。イカは岩に近づいてその岩の色に似せて体の色を変える。多くの魚はその岩に近づいていくかのように泳いでいきイカに近づく。そしてこの悪賢い生き物の餌食となるというのである。この生き物が示すのは、自らの立場を状況に合わせて変え、他の者たちと同じ目的のために立ち止まろうとせず、法廷の権力を歪曲させようとするものたちのことである。このような者たちは、自制を目指している者たちの間では自制を賞賛するが、不道徳な者たちの間では不道徳になり、快樂の内に適応していくような者たちだという（7・3）。

バシレイオスの生物観察には目を見張るものがある。彼は魚について言及しながら、理性が与えられていない魚は自らが成さなければならないことを弁えているという（7・4）¹⁵⁾。そしてもしそうであるならば、理性を与えられた存在の者たち、律法によって教えられ、約束によって励まされている者たち、霊によって知恵が与えられている者たちは、魚よりもより理解していなければならぬのではないかという。魚は将来のために何をすべきかを知っている。だが我々はどうかと迫るのである（7・5）¹⁶⁾。この一連の内容は、教会の徳を高めるためののだと彼はいう（7・6）。ここでもバシレイオスの関心事は教会であることが示される。教会は自らのために自らの情熱をコントロールすべきことを魚たちから学ぶべきだというのである（7・6）。

第8講話では更に自然界の生き物から学ぶことを鼓舞し、特に蜂から学ぶことを促している（8・4）。それが人間社会の悪の問題との兼ね合いで述べられ、バシレイオスはローマの信徒への手紙の言葉を引用して述べる。「だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。」（ロー

マの信徒への手紙12:17)「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。」(同12:21)¹⁷⁾と聖書にあるように、人間の中に存在する悪に打ち勝つためには、これらの蜂の行動から学べという。蜂は決してお互いを傷つけあうことはない。他のものたちに干渉することもない。だが、共に蜂蜜を集めるという目的のために共に生き続けている生き物だということである。彼らの賢さを見よという。なぜなら、蜂の巣はすべて等しい辺を持つ六角形だからということである(Ἐξάγωνοι γὰρ πᾶσαι καὶ ἰσόπλευροι τῶν κηρίων αἱ σύριγγες)。更に、この蜂は互いに協力し合い、目的のために生きている、理性を携えている人間はこの生き物に学ぶべきであると激励する。バシレイオスにとってこの自然界は神の主権と偉大なる御手の力が如実に表されている場として貴重な学習の場なのである。バシレイオスは聴衆を鼓舞する。世界の至るところに存在する神の御手のわざから学べ、驚け、そして神に栄光をお返しせよと。なぜなら、創造主なる神は不必要なものを一切創造なさっておられないからだという(8・7)。

最後の第9講話においてバシレイオスはある種の結論的内容を提供する。それは、人間だけが神の似姿に造られたという、創世記の記述に基づく説明である¹⁸⁾。ただし、生物との関連において、人間だけがどうやら自らの生命の目的を知らないようであるという。生物は創造主なる神を畏れている。しかし、人間はどうか。自然界を通じて人間は自らの所属を教示されているにも関わらず、自らの所属については無知であり続けている(ὅτι τὰ μὲν ἡμέτερα ὁποῖα τινὰ ἐστὶ τὴν φύσιν διδασκόμεθα, ἡμᾶς δὲ αὐτοὺς ἀγνοοῦμεν)。バシレイオスは言う。正直なところ、最も難解な科学とは己を知ることである(Τῷ ὄντι γὰρ ἔοικε πάντων εἶναι χαλεπώτατον ἑαυτὸν ἐπιγινῶναι)と。バシレイオスが注目するのは「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。」(創世記1:26)の「人を造ろう」(Ποιήσωμεν ἄνθρωπον)である。ここでバシレイオスは特に御子の存在に焦点を合わせながら、御父と御子の関係性について説明する。「完全なる人間は天使の威厳を獲得するが、創造主に似た存在が他にいるだろうか」(Τελειούμενος ἄνθρωπος πρὸς τὴν τῶν ἀγγέλων ἀξίαν ἀνάγεται. Ποῖον δὲ δημιουργημάτων ἴσον δύναται εἶναι τῷ κτίσαντι;)と述べ、ここに御子の存在を見出

そうとしているのである。人間の父と子の関係は、その父と子の絶対的必要性から同じかたちをもつものだという。しかしここで述べられる似た「かたち」とは神におけるかたちであって、人間の身体においてのものではないという。つまりそれは神の位格（Godhead, τῆς θεότητος）に相応しいかたちとしてのものであり、これを有するのは御子だけである¹⁹⁾という（9・6）。この後でバシレイオスは「神が人を造られた」（Καὶ ἐποίησεν ὁ Θεός τὸν ἄνθρωπον.）のであって、「彼らが造られた」のではない（Οὐχὶ, ἐποίησαν.）ことに触れ、そこでは聖書が複数のペルソナを回避したことについての言及を行う。つまり、神は一人であることの確認をしたのである。その後、似姿は一つのみであるが故に、御子が御父と異なる存在（ἀνόμοιον）であるなどと証言する者がどこにいるのであろうかと感情を露わにしつつ、御子が御父と類似（ὁμοιότητα）していることを述べ、その類似性は人間にも付与されているのだという。ただし、この御子と御父の本質を否定しようとする者はそのことを理解もせず受け入れることもしていないと叱責し、この後、もう暫く説教を続けようという雰囲気醸し出す。ただ、既に日は暮れ、家路につかねばならぬのでと弁明し、説教を結んで終えている。

以上が『ヘクサエメロン』の概略的内容であるが、次にバシレイオスの聖書解釈方法について少し述べておくこととする。

3. 字義的解釈か寓意的解釈か²⁰⁾

バシレイオスの解釈方法においては様々な見解が存在する。バシレイオスは一般的にオリゲネスの系譜を踏襲し、その聖書解釈法においては寓意的解釈を行う教父であると主張する学者もいれば、その反対で、むしろアンティオキア学派に傾倒していると認識する立場もある。実際、『ヘクサエメロン』においても寓意的解釈と解説を終始繰り返し行っている傾向にあることがみられるのだが、数か所において、バシレイオス自身が、聖書は字義的に把握されるべきであるとの発言を繰り返している。『ヘクサエメロン』ではそうした言葉が特

に多く見られ、このことは研究者たちに様々な憶測を齎せている。

出村和彦は第一講話の解説を行う箇所においてこの点を指摘しており、以下のように述べている。

バシレイオスはこの第一講話に引き続いて、同じ日の夕べに、七十人訳聖書にもとづいて「地は見られず未完成であった」（創一：二）から、光の創造、「一日である」（五節）という文言を取り扱う第二講話を行っている。彼が、たとえば、二節における「闇」を悪の力の象徴と解するような比喩的な解釈法を極力排して、自然の事物の創造の事柄として、聖書を字義通りに解釈しようとする態度は全講話に一貫していることで、注目に値する²¹⁾。

このように、バシレイオスが聖書の言葉を字義通りに読み理解すべきであると述べているところが散見されるというのは注目されることであるとの指摘がある中で、果してそれが何を意味するのか、多くの注目が集められ、研究者の間で絶え間ない議論が繰り広げられている²²⁾。彼はアレキサンドリア学派の系譜なのか、或いはアンティオキア学派なのか、オリゲネスに近いのか、はたまたモプスエスティアのテオドロスに類似した聖書理解に立つのか。

これらの議論は主に『ヘクサエメロン』3・9と9・1の言葉の分析が鍵となるようである。例えば以下のような記述がある。

しかしながら、水が分けられるということについて、私は教会の著者たちの見解に対して異議を唱えなければならない。この者たちは崇高な概念の影の下で隠喩の中へと飛び込んでいったのであり、水の中に霊のかつ無形の力しか見ようとしないのである（3・9）²³⁾。

更に、9・1ではこのように語られている。

私は寓意的解釈の法則を知っている。もっともそれは私自身の成果によってというよりも、他の者たちの著作から学んだものである。聖書の一般常識的理解を認めようとしない者たちもいる。その者たちにとっては、水は水を意味せず、何か別のものを意味し、更には植物にしろ、魚にしろ、彼らの幻想が切望するものを見だし、爬虫類生物や野生動物の性質を変えて、自分たちの寓意に適合させようとするのである。それはまるで夢の解釈を行う者が睡眠中にその幻を説明し、ごまかしながら自らの目的を達成しようとするようなものである。私にとって、草は草であり、植物、魚、野生動物、家畜など全て、字義通りに受け止めるのである（9・1）。

これらの言葉は一見、寓意的解釈を忌避し、そこからの逸脱を述べているようである。だが、果して本当にそうなのであろうか。

Craig D. Allertはこの点についてバシレイオスが用いているこうした表現は彼の牧会的戦略なのではないだろうかと指摘する。バシレイオス自身の聖書解釈の方法は概ね変わっていないとしながらも、バシレイオスには牧会的配慮を要する目的があったのではないかと推測している。それは、聴衆の全てが神秘的哲学的意味においての天地創造理解に達することではなく、この自然界のどの領域においても、聴衆の信仰の中において、創造主なる神への明確な想起がなされることを望んでいたのではないかというのである²⁴⁾。即ち、バシレイオス自身の聖書解釈が従来の寓意的解釈から字義的解釈に移行したのではなく、この9つの講話を聴く聴衆の必要に応じて、多少、字義的解釈に傾倒するような文言が見られるのではないかというのである。

一方で、Stephen Hildebrandはこの時の聴衆がこうしたバシレイオスの解釈法の変遷の原因ではないのだろうと推測する。バシレイオスは依然として寓意的解釈を主流としている。例えば、6・10において、月について言及している点や²⁵⁾、創世記1:11の解釈と主イエスのぶどうの樹のたとえ（ヨハネ15章やマタイ21:33以下等）との関連での説明など（『ヘクサエメロン』5・6など）は、まさにバシレイオスが好んだ寓意的解釈を施しつつ語っている証拠であり、

これは彼の解釈自体が変化していないことを如実に表しているのだという。Hildebrandの見解では、こうしたテキストが示しているのは、バシレイオスが寓意的解釈の危険性を意識しつつも、自らの解釈方法を変えることはなかったということなのではないかと主張する²⁶⁾。

この議論についてはFrances Young²⁷⁾の見解も有益であろう²⁸⁾。Youngはカップドキア教父たちの積義方法を特徴づけるのは困難極まると主張する。一体どのように描写するのが最適なのか戸惑うと言うのである。しばしば言われるのは、カップドキア教父たちの積義はオリゲネスを踏襲したものであるという見解であるが、実はオリゲネスよりもアンティオキア学派に近いとの主張も同時に存在する。果してどちらの主張が正しいのか、実際のところ判断しかねるとYoungは述べる。アンティオキア学派のように字義的解釈に傾倒するかと思いきや、オリゲネスを尊敬し、時にはオリゲネス的な寓意的解釈をオリゲネスのように成そうとする態度もカップドキア教父たちには見られる。よって、非常に理解し難いというのだ。その理由は何であろうか。Youngの主張によれば、それは当時、彼らが受けたPaideiaという教育の産物だからだという。つまりこの状態は彼らが受けた修辭学的訓練と教育の結実なのだという。そもそもバシレイオスは修辭学教師として活躍していた。しかし、その恵まれた収入源となる職業を捨てて彼は修道士となり、最終的には司教に叙階されるまでになった。『ヘクサエメロン』の中で繰り返し哲学者たちの生ぬるい修辭学的説明への叱責が展開されるのはそうした彼の経験と生い立ちの背景があるからなのだという²⁹⁾。Youngの主張によると、若い頃に受けた教育の影響が聖書解釈の方法論において、更には神学的理解にまで及ぶという。となると、その教育的背景があるが故に、所々その修辭学的危険性にも気づいていたということが言えるのかもしれない。特にバシレイオスは聴衆が誤解し兼ねない部分において寓意的解釈よりも字義的解釈を選択した可能性があるということも考え得ることになる。

いずれにせよ、バシレイオスの解釈方法はこうであると一概には断言できないのが実態である。おそらく彼は聴衆の必要に合わせて語ったのであろう。誤

解を招き、分断を引き起こし兼ねない状況を極力回避しようとしたその努力を見て取ることができるのだと言える。

4. いくつかのまとめ

これまでの議論を踏まえて、バシレイオスの創造理解についていくつかまとめてみたいと思う。まず、バシレイオスは天地創造の全てのあらゆる領域を通して創造主なる神は我々の想いをご自身へと向けさせようとなさっていると把握していることが挙げられる。創造の目的がこの神を認識することにあったと言ってよいであろう。この世界は始まりを持つ。それには始まりの原因となるお方がおられ、この世界に始まりを齎したお方が誰であるのかを探究しなければいけないと言及することで、聴衆の関心の全てがこのお方へと向けられるようにするのが天地創造の一つの目的であり役割であると考えていたようである。それは自然界のあらゆる要素において明瞭だというのがバシレイオスの立場だと言ってよい。そしてこの神こそが父・子・聖霊なる三位一体の神であることを指し示そうとしていたのである。もっともバシレイオスはこの『ヘクサエメロン』においてさえも聖霊の神性についての言及は慎重さを堅持していたように思われるが、随所、三位一体の神への言及と示唆があることは、バシレイオスにおいてはこの創造主なる神こそが三位一体の神であることを示そうとしていたと言える。

二つ目に、バシレイオスの聖書解釈についてである。彼は聴衆の必要に応じてその解釈方法を適応させる傾向があったように見える。当研究発表の筆者の見解では、基本、バシレイオスは寓意的解釈を保持し続けており、御言葉を霊的に捉え教える点が濃厚であったと思うが、場合によっては字義的解釈を強く推奨する場面も『ヘクサエメロン』ではあることから、これは聴衆のため、教会の徳を高めるためであり、一致を促すための方法論であったと言えるのではないかと考える。バシレイオスの解釈方法を劇的に変えたとはまでは断言できない³⁰⁾。いずれにせよ、バシレイオスの関心はこの天地創造の記事を通して人間

に啓示されている神とは誰かを伝えること、そしてこの神の偉大さと力を知ること、更にはこのお方が我々の神であり、哲学者たちが考え教示しているような神々でも世界でもないことを聖書は示しているのだということである。

三つ目に、教会の一致について述べる必要がある。バシレイオスは生涯を通じて、特に晩年は、教会の一致の保持のために奔走し、アレクサンドリアの継承者たちとの論駁と教会間の協力とに多くの労力を費やした。そのためにもニカイア神学の巨匠アタナシオスに6通もの手紙を宛てた³¹⁾。『ヘクサエメロン』においても随所、教会一致を促し求める記述が見られ、特に第7講話と第8講話の生物に関する考察において彼は神学的意図を顕示させている。特に第8講話の蜂の巣に関する記述(8・4)は多くのことを示唆し考えさせるものであろう。この教会の一致に三位一体の神の御旨が啓示されているとバシレイオスが考えていた、また、それを最重要課題であると捉えていたと言えるのではないかと思う。

バシレイオスがレント期間中に行ったこれらの9つの説教が当時どれほどの影響を与え、教会に対しての貢献となったのかは今となっては定かではないかもしれない。しかし、これらの説教が後代においても読み継がれ、写本され続けたことを鑑みると、その影響力は計り知れないものであると言っても過言ではないと思われる。

5. おわりに

当発表は簡潔な形での考察であったため、十分な論証には至らなかったが、今後の課題としてこの『ヘクサエメロン』に見られる三位一体論についての検証が求められることについて記しておきたい。依然として聖霊を神と叫ばないバシレイオスの姿勢がこの『ヘクサエメロン』においても示唆されるのだが、しかし、聖霊が三位一体を完成させるといった表現を用いている点について、今後更なる考察が求められると思われる。

バシレイオスの『ヘクサエメロン』はナジアンゾスのグレゴリオスやニュッ

サのグレゴリオスにとっても権威のある著作として受け止められ、また、後のアンブロシウスに至っては自身の創世記説教の手本としてバシレイオスの『ヘクサエメロン』を扱ったということが言われている³²⁾。それほど衝撃的な著作であったということなのであろう。バシレイオスも人間であり、時の人であった。自身の時代の波にのまれ、その嵐のような中を渡り歩いた人物である。しかし、その彼にとっての錨となったものが聖書の御言葉であったことは間違いない³³⁾。聖書をどのように理解し、解き明かし、語り継ぐか、そしてそのことを通して、教会をどのように養い纏めるか、これがバシレイオスにとっての最大の関心事であったと言える。彼の該博な知識が示すように、彼は当時の思想や哲学、文学に精通していた。だが、その根底に常にあったのが神の御言葉である聖書である。そしてその聖書が示す神に対する深い信仰である。『ヘクサエメロン』を読み進める上で我々をも誘うこのバシレイオスの創造主なる三位一体の神への信仰と熱意に心動かされるのは当発表の筆者だけではないのではないかと思う。バシレイオスの言葉は我々に多くのことを教示し、省察させる。これからの時代においても更に多くの読者に読み継がれることが期待されると思う。

(いいだ・あおく)

注

- 1) 当論文は東京神学大学博士課程後期課程研究発表（2024年6月25日）にて発表した内容を加筆修正したものである。
- 2) R.P.C. Hanson. *The Search for the Christian Doctrine of God: The Arian Controversy, 318-381*. (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 1988), p. 676. 3人の詳しい神学的貢献については当書籍の第21章「The Cappadocian Theologians」(pp. 676-737)を参照のこと。
- 3) アンソニー・メレディス『カッパドキア教父：キリスト教とヘレニズムの遺産』（津田謙治訳、新教出版社、2011年）、20-29頁。
- 4) 当発表での原文引用は Basile de Césarée, *Homélie sur l'Hexaéméron, Texte grec*,

introduction et traduction de Stanislas Giet (Sources Chrétiennes 26bis), 2^e édition 1968. からのものである。

- 5) 正確な年代は不明であり、現在に至るまで議論が継続されている。
- 6) Charles Kannengiesserは以下のように言及する。「9つの説教である『ヘクサエメロン』は一週間の間に説教された。これらは修辞学的に美辞に富み、神の創造の美に焦点が当てられ、異端的概念とマルキオン主義的二元論への反駁の意が込められている。これらはバシレイオスの自然科学とその知識の原典への豊富な知識への証言がなされると同時に、彼の創世記第一章の釈義を垣間見ることができるのである。」 Charles Kannengiesser. *Handbook of Patristic Exegesis Volume Two*. Leiden/Boston: Brill, 2004, p. 742.
- 7) 出村和彦はこう解説する。「バシレイオスがこれについて連続講解説教をして以来、『ヘクサエメロン』の語は、創世記註解の一ジャンルを指す語として定着している。」(『中世思想原典集成2 盛期ギリシア教父』平凡社、1992年、282頁)。
- 8) Jackson, B. (1895). Introduction to the Hexaemeron. In P. Schaff & H. Wace (Eds.), *St. Basil: Letters and Select Works*. Vol. 8, p. 51.
- 9) 出村、282頁。
- 10) 当論文163頁の Francis Young の指摘も参照されたい。
- 11) 『中世思想原典集成2』、285頁、『ヘクサエメロン』1・1。
- 12) 同上、288頁、『ヘクサエメロン』1・2。
- 13) ナジアンゾスのグレゴリオスとの兼ね合いについては田中従子『ナジアンゾスのグレゴリオスの聖霊論』(教文館、2024年) 第IV部「聖書と三一の神」(219-277頁) を参照されたい。
- 14) Sutanislas Gietのギリシア語本文の脚注によると、おそらくバシレイオスはブネウマトマコイ(聖霊反対論者)たちとの論駁があったため聖霊を神であると明言することを避けたという。«dans sa lutte contre les Pneumatomaques, Basile évitait de dire que l'Esprit Saint est Dieu; mais il a multiplié à plaisir les formules qui affirment implicitement sa divinité» (Basile de Césarée, *Homélie sur l'Hexaéméron*, 168). しかし、直接的な表現は避けたものの、間接的には聖霊が神であることを、聖霊によってこの「祝された三位一体が完成される」という表現をバシレイオスが使用している点には注目しておきたい。(καὶ μὴδὲν ἄλλο Πνεῦμα Θεοῦ, ἢ τὸ ἅγιον τὸ τῆς Θείας καὶ μακαρίας Τριάδος συμπληρωτικὸν ὀνομάζεσθαι)
- 15) バシレイオスは魚だけでなく、蠣などにも触れており、その観察力と自然界に

おける（特に海の中における生物の）豊富な知識には感心させられる。これも彼の若き日からの教育レベルの高さを物語っていると言えるのかもしれない。

- 16) バシレイオスが凶暴な魚について述べている内容がある。彼はその凶暴な魚を家族関係や人間関係になぞらえて話を進めていく。ここではこの凶暴な魚が凶暴な夫として描かれており、彼はその関係性の中においても神の守りがあることを語る。そのような凶暴な魚さえ、自然界では神の御手の中にある。それゆえに、人間関係も同じであり、神があなたを守らないわけがないではないかと述べる。
- 17) 聖書の引用は全て新共同訳からである。
- 18) ここでバシレイオスは象（τῷ ἐλέφαντι）に言及する。象という巨大な動物を人間が支配することが可能なのは、人間が神の似姿に造られたからだという。巨大であり長生きする（バシレイオスは象が300年以上生きると言う）このような生き物さえも治めることを神が人間にお許しになったのは、人間が神ご自身の似姿に造られたからで、この一点に限るのであると述べる。
- 19) Υἱοῦ μὲν γὰρ καὶ Πατρός πᾶσα ἀνάγκη τὴν αὐτὴν εἶναι μορφήν θεοπρέπῳ δηλοῦντι τῆς μορφῆς νοουμένης, οὐχ ἐν σχήματι σωματικῷ, ἀλλ' ἐν τῷ ιδίωματι τῆς θεότητος.
(518)
- 20) ここでは「字義的解釈」を「歴史的文法的解釈」と同じ意味として使用する。テキストが書かれた時代背景を尊重し、テキストが元々持っている言語的意味を第一義の意味として捉える立場のことを指すこととする。一方で「寓意的解釈」とは、その出来事の歴史的背景や状況には深い関心を示さず、むしろ神秘的靈的意義をそのテキストから見出そうとする立場を指すものとしてここでは使用する。テキストは靈的意味を示すものであり、その歴史的言語的文法的意味というのはここでは一義的でないことを意味する。
- 21) 『中世思想原典集成2』、283頁。
- 22) Craig D. Allert. *Early Christian Readings of Genesis One: Patristic Exegesis and Literal Interpretation*. Downers Grove, IL: IVP Academic, 2018.; Stephen M. Hildebrand. *The Trinitarian Theology of Basil of Caesarea: A Synthesis of Greek Thought and Biblical Truth*. Washington, D.C.: The Catholic University of America Press, 2007.; Stephen M. Hildebrand. *Basil of Caesarea*. London and NY: Routledge, 2018.; Adam Rasmussen. *Genesis and Cosmos: Basil and Origen on Genesis 1 and Cosmology*. Leiden/Boston: Brill, 2019.; Isabella Sandwell. “How to Teach Genesis 1.1-19: John Chrysostom and Basil of Caesarea on the Creation

- of the World,” *Journal of Early Christian Studies*. 19:4, 2011, pp. 539-564.; Frances Young. “The Rhetorical Schools and Their Influence on Patristic Exegesis,” in *The Making of Orthodoxy: Essays in Honour of Henry Chadwick*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989, pp. 182-199.などの文献がこの議論においては有益である。
- 23) 研究者の中にはバシレイオスがオリゲネスのことをここで批判しているとする見解が一般化されている。しかし、それには依然として疑義もかけられている。
- 24) Allert, 200.
- 25) 月の形が変わるのは、我々の性質の変化を表しているのだとバシレイオスが発言している内容のことを指す。
- 26) Hildebrand, 137-139.
- 27) Frances Young. “The Rhetorical Schools and Their Influence on Patristic Exegesis,” in *The Making of Orthodoxy: Essays in Honour of Henry Chadwick*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989, pp. 182-199.
- 28) もう一人の研究者 Isabella Sandwell の論文も注目に値する。Isabella Sandwell. “How to Teach Genesis 1.1-19: John Chrysostom and Basil of Caesarea on the Creation of the World,” *Journal of Early Christian Studies*. 19:4, 2011, pp. 539-564. ただし、当論文の主旨からは少々逸脱するためここでは扱わないこととする。Sandwell の論文ではバシレイオスとクリュソストムス (347-407年) の説教の比較がなされ、大変興味深い。クリュソストムスは386年から397年においてアンテオケの司祭として活躍し、後に397年から407年までコンスタンティノポリスの司教としてその職務に就いた。この二人の創世記第一章に対するアプローチの仕方が異なることを理解することで、バシレイオスが如何に論理立てて語り教えたかが明白となり、更に彼の焦点が哲学的自然科学的内容を通して語る神の存在と偉大な力、そして秩序であったということが明瞭となる。
- 29) Young, 195-6.
- 30) 背景にあるギリシア哲学的概念及びグノーシス主義的二元論的世界観に対するバシレイオスなりの抵抗ゆえに字義的解釈を促した可能性が大いに高いと思われる。この点、今後も更なる検証と考察が求められるが、Allert (199-200) , Rasmussen (78-80, 134-147) , Sandwell (543-548, 560-561) も類似した結論に至っているようである。
- 31) 拙論「教会の一致を求めて—カエサリアのバシレイオスからアタナシオスに宛てられた書簡の考察—」『神学』85、2023年、70-85頁。

32) Sandwell, 542.

33) Hildebrand. *Basil of Caesarea*, 23.